栃木県中学校長会 会報

部活動について

全日中校長会より，従来さまざまな問題が指摘されている部活動対策の資料として，調査の依頼があつた。本県では，都市部．農山村部と別けて抽出し調査をお願いした。調査についてのご協力に深謝すると共に，その若干について結果の概略を，紙面の都合があるので数字表を略し諮問回答の形式で報告とする。

設問1　部活動を，学校教育活動．社会教育活動など，どのような性格をとらえていますか。

（回答）　大半の学校（96％）が学校教育活動としており，一部分では，今後の事情により社会教育活動にと考えたいとしている所もある。

設問2　部活動への教師参加状況について

（回答）　文化活動も含めて全教師が分担しているところがほとんどである。

設問3　土。日を加えて部活動の週あたり平均時数について

（回答）　8〜15時間が多く，勤務時間内に終了はむずかしい状況である。

設問4　部活動で教師の事故があつた場合の処理について

（回答）　学校教育活動の延長における，奉仕活動であるとの考えから勤務時間内の事故として処理されている。

設問5　部活の活動状況，父母の理解状況はどのようになつているか。

（回答）　希望生徒参加であるから，参加者全員が満足しているところが大半であり，父母も協力的であり，積極的な姿勢を，自発的に示している。

設問6　指導者にはなんらかの手当を出しているか。

（回答）　本県で教育特殊業務手当として4時間程度の部活動については500円が支給されている。このためか，一人あたり1〜2万円程度の手当であり，私費で加算支給している学校が多い。

設問7　私費による指導手当の出所について

（回答）　父母の負担，全生徒からの徴収，部活動参加者のみからの徴収．スポーツ少年団．後援会，育成会などの組織を通じてなど集金支出方法．金額，それぞれの学校．地域の実情によつて異なつており，廃品回収．即売会などの生徒会．ＰＴＡ活動に依るところもある。

設問8　部活動のため公費で予算化されていますか。

（回答）　中体連負担金．報償金．備品購入費．消耗品費．選手派遣費．クラブ活動援助費などの名目で支出されているところが多し，金額について雑多であり，それぞれの地域で，公費としての予算化に苦慮している模様がうかがえる。特に生徒輸送費であるが高騰化の傾向にあり，市町村によつては公費支出もあるが追いつけず，父母負担も過重となつている。公的所有のマイクロバスの利用をしている学校もあるが，これにも限度がある。

部活動は生徒の重要な関心事である。小学校で運動クラブ活躍した者が，中学校に入学し，その種目ができなくなると無気力になり，授業に対する意欲も失つてしまうこともある。三年生の上級進学希望者に「Ａ高校を望むのはなぜか」の問いかけに，一応は将来の職種は答えるもの，話をしているうちに「○○部をやりたい」と本音のようなものが出てくるし，部活動が生きがいなのかと思わされる者もある。優ぐれた技をもてば，高校への内申条件の考慮もある。

それにしても生徒たちは，身体に特に故障のない限り，伸び伸びと思う存分に校庭を歩り廻り，体育館で好きなことに身体を動かしていたいであろう。またそれが子供たちの本来の姿なのではなかろうか。中学生の過半数が進学希望であり，希望する高校が狭き門であるために，上位の点数獲得者とならなければならず，いきおい学習も授業だけでは間に合わず，自宅で深夜までの学習はまだしも，塾通い，家庭教師への依存となる。だれでもができるだけ苦労は逃れたい。部活動であるから文化．生産の部門があるのだが体育部に参加生徒が集中するのもわけがある。３年生後半ともなれば机上の学習ものっぴきならぬものになる。

１．２年生の時に羽根をのばしたい気持もわかる。

いまの生徒の余暇の過ごし方をみると，授業での保健体育指導ばかりでなく，課外の諸活動に体力増進の方途をのぞまなければならない。それがために，指導者．経費．時間．事故発生時の対応など，義務教育であるだけに，学校．地域によつて多様な問題をかかえ，どこの学校でも苦労している姿がうかがわれる。

詳細な統計については，後日発刊される全日中の特報を参照していたゞきたい。

田原中　　吉高神　猛二郎

創意を生かした教育活動の時間について

創意を生かした教育活動の時間は各教科の授業時数の削減によつて生み出された時間である。

そのねらいは，ゆとりある充実した学校生活を実現するために，各教科の指導内容を精選し週当り３〜４時間の削減となる。しかしこれは従前と同じ程度の在校時間を前程とし，給食や休憩及清掃等を含めて，学校教育全体にわたつてゆとりをもたせるとともに，地域や学校の実態に応じて，各学校の創意を生かす，教育活動ができるように設定されている。

しかしこれは創意を生かした教育活動を設けることが，ゆとりある学校生活の実現であるかのように受けとられる向きがある。毎時間の授業や毎日の日課などの学校生活全体にゆとりをもたせ，教育活動の充実を図ることが何よりも大事であると考える。

次に創意を生かした教育活動の時間は，内容の定められた教育課程とは区別して考えられる時間であつて各学校にまかされている。従つて昼休みの時間にゆとりを持たせるために使つてもよいし古墳の見学やその他野外活動に使つてもよい。また何週間分か寄せ集めて宿泊訓練などを実施してもよいことになつている。

従つて創意を生かした教育活動の時間を活用し教育活動を立案する際には，どの分野にどのように活用すべきか，学校教育目標に照らして位置づける必要がある。つまり教育課程に位置づくものもあろうし，教育課程外の活動にあてられる場合もあろう。

なお創意を生かした教育活動の時間の日程への位置づけを一例をあげると下記のようになると思う。

日程表（例）

日課	時刻	月	火	水	木	金	土
朝のドリル	8:10 8:20	全校朝会					
朝の会	8:20 8:50						
1校時	8:55 9:25	○	○	○	○	○	○
2校時	9:35 10:25	○	○	○	○	○	○
3校時	10:45 11:35	○	○	○	○	○	○
4校時	11:45 12:35	○	○	○	○	○	清掃 終りの会
給食	12:35 1:15						
昼休み	1:15 1:45						
5校時	1:45 2:35	○	○	○	○	○	
6校時	2:45 3:35	創意を生かした教育活動の時間	○	清掃 終りの会	創意を生かした教育活動の時間	○	
清掃	3:40 4:00						
終りの会	4:05 4:15						

○印は教科等の授業を示す。
創意を生かした教育活動の時間で，活動の内容によっては，清掃・終りの会を先にやることもあり得る。

なお創意を生かした教育活動の内容については中学校教育課程一般編第２章第３の２の(5)などを参照していたゞきたいと思います。

雀宮中　　高　柳　　久

「教育機器（L.Laboを中心として）を利用した英語指導法の工夫」

鳥山町立鳥山中学校長　倭　文　威　夫

1. はじめに

本校は，昭和５５．５６年度の２か年にわたり文部省より，中学校機器利用英語教育研究校の指定をうけ，１年次を終了する段階にある。

上記の研究テーマは，次の観点より設定した。

- 学校教育目標具現化の立場から
- 「聞くこと．話すこと」の能力の育成と「英語の基礎的．基本的事項」の定着の立場から
- 普通授業とＬ．ＬａｂＯ授業とを関連づけ指導の効率を高める立場から
- 学習の個別化をはかり，確かな学力を育てる立場から

2. 研究の仮説

(1) 英語指導の中心を普通授業におき，課ごとに言語活動を重点化し，その相補的関連において，Ｌ．ＬａｂＯを活用すれば，生徒の英語運用能力は高まるであろう。

(2) 指導内容を精選し，生徒の実態に即して――教科書の教材内容に即したり，生徒の意識や関心に沿つた教材を用いて――Ｌ．ＬａｂＯの自作教材を作成し，Ｌ．ＬａｂＯによる文型文法事項の練習や，聞くこと話すことの基礎指導を継続して進めれば，英語への関心は高まり，英語の基礎的．基本的能力は定着するであろう。

(3) 生徒の実態に応じた教材で聴解指導にＬ．ＬａｂＯを活用し，学習評価を併用して継続指導を行いば，理解力は高まり，他の技能の向上にもつながるであろう。

3. 教育内容

(1) 教育機器（Ｌ．ＬａｂＯを中心として）の利用方法。

(2) 普通授業の重点化と類型化。

(3) 普通授業とＬ．ＬａｂＯ授業の関連指導のあり方。

(4) 指導計画の作成。

(5) Ｌ．ＬａｂＯの活用と個別指導のあり方。

(6) Ｌ．ＬａｂＯの教材研究と自作教材の開発。

4. 研究の方針

(1) 新指導要領の趣旨に即し，週３時間体制下において，使える英語，生きた英語の教育をめざす。

(2) Ｌ．ＬａｂＯの特性を生かし，英語に興味をもたせて，音声面の指導を中心に，聴解力や基礎的．基本的事項の定着をめざす。

(3) Ｌ．ＬａｂＯの指導に終らず，合わせて普通授業の質をこれまで以上に高め，関連指導のもとに，より効果的な指導になるような研究にする。

(4) 普通授業の進め方も，Ｌ．ＬａｂＯのソフト．ウエアー観そのものも，これまでとは異なつて，思いきり発想を転換して，能率的な指導のあり方を見きわめていきたい。

(5) Ｌ．ＬａｂＯやテープレコーダーを活用し，できるだけ多くネイテブ．スピーカー（英語を母国語とする人）の正しい音を継続して聞かせる（英語にひたらせる）よう努力する。

(6) 英語科の研究を核とし，他教科の研究と協力提携しながら研究を進める。

(7) Ｌ．ＬａｂＯを中心としながら．アナライザー．教材提示器．ＶＴＲ．ＯＨＰ等の複合利用の研究にあたる。

(8) 評価を工夫しながら学習の個別化にあたる。

5. 研究の重点

(1) １年次

ア　普通授業の重点化とＬ．ＬａｂＯ授業の関連指導方法の工夫。

イ　Ｌ．ＬａｂＯを利用した指導計画の作成。

ウ　自作教材の開発と活用。

(2) ２年次

ア　普通授業の重点化とＬ．ＬａｂＯ授業の関連指導の充実。

イ　Ｌ．ＬａｂＯを利用した「基礎的．基本的事項の定着」と「聴解力を高める指導」

の工夫。

ウ　自作教材の開発と活用。

6. 教育機器利用の基本的態度

機器利用のねらいは，指導目標の達成であり生徒の実力を，ねらいとするところまで高めることにある。学習の主体は生徒であり，人間尊重の理念に従い，生徒の主体的な活動をめざして，生き生きした授業になるよう努力する。機器はそのための一手段である。

基本的態度として

(1) 普通授業が中心であり，L．Laboはその補足として活用する。

(2) 普通授業とL．Labo授業の関連をはかりながら，A－A－C（個別化ができるシステム）の機能が十分発揮されるような活動を工夫する。事前指導．事後指導を十分に行い，生徒に抵抗なく，無駄もなく進められるような配慮をする。

(3) L．Laboの授業では，ア．英語の基礎的．基本的事項とイ．聴解指導の二つの活用をとりあげ，研究の焦点とする。

(4) ひとりひとりを育てる指導として，検聴，相互通話．机間巡視など能率的な個別指導を行い，「ほめる」「励ます」「認める」ことばを忘れず，意欲をもたせる。

(5) 週1時間はL．Labo教室を位置づけている。利用時間は$\frac{1}{2}$時間から1時間全部の範囲となる。

7. 本校のL．Labo教材観と自作教材の開発

(1) 教科書の内容に沿つたり，発展教材になれるような題材や文型を選ぶ。

(2) 生徒の生活や意識に即したものであること。

(3) 文型を精選し，繰返しドリルして定着できるようにする。

(4) テープの長さは，8分位とする。（3回くり返して25分以内）

(5) 初めにスロー（ゆっくり）でも，除々に自然の速さに近づける。

(6) 1ステップの文例は4～5とする。

(7) 問題1は，例文と同じものとし，抵抗を少なくする。

レコーデングでは，県研修センターに負うところが大きい。

確かに自作教材は意図する教材がつくれ，生徒達の実態に即し，活用しやすい。

7. 授業の重点化と、L．Labo授業の関連指導

授業を，A，B，Cのタイプに分け，指導の重点化をはかっている。

Aタイプ――リコグニション（内容理解．読解）を重点とし，聴解力．読解力を育てる授業。

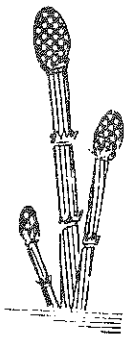
Bタイプ――プロダクション（話すこと．書くこと）まで集中訓練する授業。L．Laboで集中的に訓練するものと普通授業で定着をはかる二面がある。

Cタイプ――認知できた事項をプロデュース（話せる．書ける）できるところまでねらいとする授業。

普通授業をいかに重点的に指導し，その英語を使いながら，L．Labo授業でどこまで集中的に訓練し定着させるかが授業の効率を決定づけるものとなろう。

8. 研究の中間成果

確かに生徒の聴く力は高まり，音声面での質的な変容がみられる。

また，機器への興味を示し，L．Labo教室での学習が楽しみになつてきている。

さらに，L．Laboの操作訓練になれて，自分の速さで学習ができ，個別化の効果が表れてきている。